

国語（中）部会

I. 研究の概要

1. 研究主題「主体的な思考・判断・表現を伴う学びの創造」

～記述と対話を中心とする言語活動の深化をめざして～

2. 主題設定の理由

令和3年1月の中教審答申によると、これからの時代は「Society5.0」と呼ばれる、社会の在り方が劇的に変化する時代を迎えており、近年の情報化やグローバル化といった社会の変化が、加速度的に進展し、より複雑で予測困難な状況になっていくであろうと捉えている。

このような時代だからこそ、子どもたち一人一人が、予測できない変化に対して前向きに向き合う必要がある。そして、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生社会の在り方を考え、試行錯誤しながら、問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、持続可能な社会の創り手となっていくことができる力を身に付ける必要がある。そのためにも、学力の三要素【基礎的・基本的な知識・技能、知識・技能を活用して課題を解説するために必要な思考力・判断力・表現力、そして、主体的に学習に取り組む態度】のバランスのとれた育成や言語活動の充実を図ることが重要である、としている。

我々、教員は、そのための一つ的手段として、「生徒の主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を活性化していくことが重要である。授業においては、今後も、単元や題材のまとまりの中で、子どもたちが「何ができるようになるか」を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と、「どのように学ぶか」という学びの過程を組み立てていく必要がある。

このような視点を持って授業改善を図ることが、子どもたちの学びに向かう主体性や思考力・判断力・表現力を育てることにつながるはずである。

3. 研究仮説

記述と対話を中心とする言語活動の工夫を通して、確かな言葉の力（思考力・判断力・表現力）を育てることができる。

4. 研究内容

(1)教科書教材についての 実践研究 ・記述と対話を中心とする 言語活動の設定 ・教材の指定はしない ・ICTの積極的な活用	(2)教科書教材以外につい ての実践研究 ・記述と対話を中心とした 授業構想力を高める実践 ・言語能力を高め、言語感 覚を豊かにするための実践 ・優れた教材の開発 ・ICTの積極的な活用	(3)理論研究 ・国語教育を取り巻く現状 や課題について学び、課題 解決の方策の手がかりを得 ることで、直面する課題 に対応する教師の力を高め る。	(4)教育課程研究 ・平成30年度に基底編、 令和2年度に展開編を作成 した。今後はそれらを活用 し、研究主題の解明に努め られるよう、必要な調査や 資料収集、研究等を行う。
---	--	--	---

5. 研究方法

- | | | |
|------------------|----------------|--------------|
| (1)地域サークルでの研究推進 | (2)石教研第二次研究協議会 | (3)各種研修会 |
| (4)部会情報「一語一会」の発行 | (5)ホームページの更新 | (6)教育課程委員研修会 |

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の成果

- 4月12日(火) 石教研専門部会 第一次研究協議会(各校において Google Meet にて参加)
- 9月12日(月) 理論研修会(於 研修センター)
- 10月14日(金) 石教研専門部会 第二次研究協議会(各校において Google Meet にて参加)
- 2月〈予定〉 各市町村 第三次研究協議会

2. 専門部会 第二次研究協議会での交流

(管内各校において Google Meet にて参加 配信は千歳市立青葉中学校から行った)

(1) 専門部会 第二次研究協議会での交流内容



【1年生 単元名「言葉に立ち止まる」 教材名「言葉を集めよう」】

○授業者 : 橋本 麻瑚 教諭(千歳市立向陽台中学校)

○本時の目標 : 食べ物の特徴を様々な語彙で表現し、自分の考えを伝えようとしている。

ラウンジに積極的に取り組み、前時で作成した辞書を活用しようとしている。

本時の展開(3/4)

	学習活動	教師の働きかけ	形態	備考
導入 5分	①本時の課題を確認する。 課題 食べ物の魅力をいろんな言葉で伝えよう。		全	タブレット・辞典(サイト)
展開 40分	②ジャムボードにまとめた連想類語辞典を見直す。(5分)	改めて様々な言葉に触れさせる。	個	
	③食べ物がいない状態で全体でラウンジを行う。(7分)	ラウンジのルール確認	全	ラウンジ使用 ジャムボードはタブに入れておき、いつでも見れるように。
	④列ごと(全部で3列)にラウンジを行う。 食べ物を実際に食べる。 (9分×3)	回答者(2人)は食べ物をみないこと。 ヒントを出す人は、観点ごと(見た目・味・食感)で出す。 食べていない人は、「見た目」のヒントを出す。 知らなかった語彙は自分の辞書(ジャムボード)に書き込むこと。 答えられなかった場合は、どんな語彙があれば良かったか、答えられた場合はどの語彙が良かったのかを確認する。	全	A ガトーショコラ B パウムクーヘン C 饅頭
	⑤食べ物を表現するのにふさわしいと思う語彙に○をつける。	○の個数 6以上…5 5…4 3～4…3 1～2…2 0…1		ジャムボード使用
まとめ 5分	⑥次時の確認。 実際に食レポを行い、動画撮影。	次時にまず食レポの原稿となる紹介文を書くことを説明する。	全	生徒のPCで撮影させる。

▼授業者より

ラウンジやジャストワンなどの ICT を活用して、語彙力が高まるような授業を心がけた。

▼意見交流(抜粋)

■タブレット操作を含めて、実際に授業を観たかった。積極的に機器を使う必要性を感じた。■今までになく斬新で刺激を受けた。■食べ物以外の活用でもよかったのでは。■ラウンジが有効と感じた。テスト前などにも活用してみたい。

▼質問と回答(抜粋)

○質問：テキストマイニングを使って語彙に触れさせるとはどういうことか。

●回答：ある物を説明する際に、同じ言葉を書くとその言葉が大きくなる。大きくなるということは、たくさんの人が同じことを書いているということなので、生徒は違った表現を考え、色んな言葉を探す…ということが、語彙に触れるということです。

○質問：次時の「食レポ」の評価はどのように行うのか。

●回答：評価については曖昧になっている部分もあるので、適切に評価していきたい。

【2年生 単元名「人間のきずな」 教材名「字のない葉書」】

○授業者：星野 愛 教諭(千歳市立青葉中学校)

○本時の目標：表現に着目して、人柄や心情について読み取る。

本時の展開(3/4)

	学習活動	教師の働きかけ	形態	備考
導入 10分	① 前時の振り返り	・ベア1分間	ベア全 個	—対話1— 教科書 P110 ②-③の課題
	② 本時の課題を確認する 課題 「後半 妹の変化と父親の心情変化を読みとろう。」	・板書(ノート)		
	③ 本時の読みとる後半部の文章を音読する ※できればラインを引きながら読む。	・個人3分 ※1分400字ペース		
展開 25分	④ P108・109 「妹の様子」がわかる所、8ヶ所に線を引き。 I・個人で活動 → 全体で答え合わせ 3分 5分	・できた人から教師へ提出 ※全て引けた人にはご褒美シール	個 個 全	教科書直接 プロジェクト —に映して ノート評価 —記述1— —対話2—
	⑤ ③で確認した箇所その時の「父親の心情」 を読みとってノートに自分の言葉で書く。 説明3分 (3問・文末・ヒント 確認) 活動8分 ・父の行動 ・人柄	・書けた人から教師へ提出 ※全て書けた人にはご褒美シール →リトルティーチャーに任命 ・「父親の立場だったらどう思う?とだけ聞くこと」「答えは言わない、見せないでヒントをあげる」2点確認。 ※友達が全て書けたら教えてあげた人に、もう1枚ボーナスシール		
	⑥ 答え合わせをする。ノートに書く。 3分	・答えプリント配布 ※修正はペン使用を指示		
まとめ 15分	⑦ 「まとめ」をノートに書く。10分 例 遠足に行くようにはしゃいで疎開先へ向かった妹だったが、想像を絶する苦しい生活に衰弱した体で家へ帰宅した。52字 (1文、60字以内) 父親の心情「お前の命を守るつもりで行かせたが、自分が悪かった。手放して気づくなど遅い。自分も父として不甲斐ない。戦争が憎い」56字 (60字以内)	・「妹の変化」と父親になったつもりで「父親の心情」を書くよう指示。	個 全	記述2 机間巡視 ノート評価
	⑧ 生徒同士のまとめを交流する。5分	・ノート回収		

▼授業者より

思考判断表現を意識した授業で、どのような生徒でも取り組めるような授業を考えた。全員が意欲的に取り組んでいたのでよかった。

▼意見交流(抜粋)

■ゴールがよくわかる授業展開であった。生活とのつながり、何のために学習するのかということがあるとよい。とても丁寧な指導だった。■課題とまとめが整理されている点、1時間の中でまとめまで終わっていることがよかった。生徒の考えを聞きながら素早く対応していた。■その場で指摘できる活動がとてもよかった。リトルティーチャーを有効に活用することが参考に。■読んだり書いたりする時間がしっかりと設定されていて、ほとんどの生徒が取り組むことができていた。■生徒との細かいやり取り、字数を設定する・語尾を示すことが素晴らしかった。■国語の課題が教員の目標になっているが、それは身近に感じるだろうか。自身の課題でもある。

▼質問と回答(抜粋)

○質問：並ぶ生徒が多いことについて

●回答：待っている生徒が多くお客さんになりがちだが、1年生の時からこのようなスタイルである。

○質問：全体での交流がもっとあってもよいのでは？

●回答：その通りである。次の時間は全体交流を多くしていた。

○質問：あと一か所という指導では、間違っていたのか。もし間違っていた時はどうしているか。

●回答：あと一か所は間違っているところに線、間違いが分かるように伝えている。特に「妹が帰ってくる日」の部分を見つけることが出来ていなかった。

○質問：中3になったときに、どの程度の書く力を付けたいか、イメージを教えてください。

●回答：書く抵抗感はあるが、やる気になる発問、投げかけをしていきたいと思っている。細かい時間で区切ることで、あきらめずに頑張ることを重視している、それが入試などにつながれば嬉しい。

○質問：シールの扱い、リトルティーチャーの位置付けはどのようなものか。

●回答：できた感覚を持たせるため、意欲付けのためシールを。ノートの裏表紙に貼らせ、楽しんでいる。ノート点検の時にも生かしている。リトルティーチャーは学び合い、意欲づけ、活躍の機会提供。

【3年生 単元名「言葉とともに」 教材名「俳句を作って楽しもう」】

○授業者：北條 裕 教諭(千歳市立千歳中学校)

○本時の目標：「書くこと」において、多様な読み手を説得できるように、文章の構成を工夫することができる。

進んで表現のしかたを考えるなど、自分の考えがわかりやすく伝わる文章になるように工夫することができる。

本時の展開(4/4)

	学習活動	教師の働きかけ	形態	備考
導入 5	①本時の課題を確認する	・四句下書き用プリント、清書用プリント配布	全	
	課題 初句をつけて、自分の俳句を完成させよう			
展開 40	②春夏秋冬の季語を含んだ初句(五音)を、それぞれひとつずつ考えて送信する	・五音になるように調整させる ・ネットの歳時記を参考にする ・送信された初句をまとめる	個	Googleform使用
	③他の生徒が送信した初句を見て、自分の俳句にふさわしいものを探す	・集計した初句を春夏秋冬の順に表示していく ・自分が送信した初句以外を選ばせる	全	テキストマイニング使用
	④春夏秋冬の四句を比較し、班で交流する	・句の雰囲気の違いを伝え合う	班	4人グループ
	⑤自分の俳句(春夏秋冬)に、どのような解釈が成立するようになったか書く	・自分の解釈だけでなく、班員の解釈も参考にして書かせる	個	
	⑥各自一句を選び、清書する	・自分自身でもハッとした句を選ばせる	個	後日、廊下に掲示する
まとめ 5	⑦プリント2枚回収		個	

▼授業者より

今までは自由に作ろう、とやってきた。しかし、俳人「夏井いつき」さんによると「俳句の作り方の基本」がある。しかも上からつくるのではなく、「下から作るもの」であるとのこと。安易に字余りや字足らずもすべきではない。五・七・五にこだわることの大切さ。というものにこだわって、今回は俳句の創作授業に挑戦してみた。

▼意見交流(抜粋)

■ICTのよしあし
■鑑賞の楽しみもありましたね。
■タブレットを使い、色々なものが凝縮されていた。
■取り合わせよかった。
■他の人がこんな作品をつくったんだなという、討論の授業もできそうですね。
■生徒の活動の場面、もっと見たかったですね。

▼質問と回答(抜粋)

○質問：上から作ると、下から作ることの違いは？

●回答：基本的に初句切れになる。

下から作ると、七・五以下のおもしろさが生まれ、間ができる。

季語を入れないことのほうが大変ですよ。

○質問：下から作った方が奇跡の一枚ができるんですね。ICTの使用はどのくらい？

●回答：夏休みから少しずつ使い始め。国語では試行錯誤の段階。苦労もある。

(2) 専門部会 第二次研究協議会での協議内容

(各学年で分科会を設け、レポート交流からコロナ状況下での、端末をいかした授業の工夫などを話し合った)

<第1学年 分科会の様子>

【レポート交流から】

『シンシユン』シンタの心情曲線の作成『言葉を集めよう』紹介する物を決め、観点を決め、マッピングを行う。『大人になれなかった弟たちに…』個人内思考を深め、全体思考につなげる実践。ジグソー学習。他の戦争文学との比較 共通点を見つけ出す。『詩の世界』「カムチャッカってどこだろうね？」等発問の工夫で地図帳を開かせる等教科横断的な学習に結びつけている。『思考のレッスン1』ICTを手段として使う。持続可能なもの。『漢字の成り立ち』小中一貫の中30人小12人。教室に42人くらい小学生にうまく教えたいという思いが主体性を生む。教えたい気持ちは誰しもある。

▼全体的に、主体性を育む教材・アイディアを授業に生かしていた。文学教材・古典・言語・話す・聞く等、どの教材でもICTを使うことが目的ではなく、どのような場面でICTを使うのかということを考えていく必要がある、という議論になった。

<第2学年 分科会の様子>

【レポート交流から】

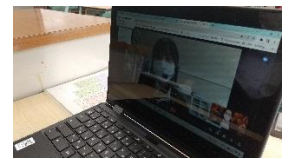
『モアイは語る』生徒が本文をもとに自分で考える時間を大切にしている。生徒の考えを共有し、思考の手助けをするツールとしてタブレット端末を活用している。『クマゼミ増加の原因を探る』「記述と対話」の難しさを感じている。活動における指示語を大切に取り扱い、根拠や仮説などを丁寧に確認している。生徒用のデジタル教科書が使いやすい。本文のコピーができるため、短時間で確認できる。ピクトグラムの活用も効果的である。まとめ作業を家庭学習にも応用させていきたい。『生活体験文』「先生が楽」「生徒も楽」「楽しんで身に付くデジタル素晴らしい」もちろん、百文字作文や視写などのアナログ教材なども大切にしていきたい。『走れメロス』Jamboard (思考ツール、ディベート用紙) やForms (結果投票・感想) を使ってディベートを行った。『聞き上手になろう』自分のインタビューを録画し、動画を客観的に確認することで、話し方や表情、視線などに意識を向けて改善することができた。『短歌甲子園』「短歌を味わう、親しむ」の学習後、短歌の制作・発表・批評を行った。楽しみながら短歌の魅力や言葉の持つ価値を認識することができた。『字のない葉書』話し合いマニュアルの活用や、思考ツールを取り入れ、自分の考えを整理したり補助したりするだけでなく、話し合い活動の場面でも、自他の考えをまとめやすくするような工夫を行う。『故郷』実技・理論研で学んだ質問づくりの試行。読めていなかった部分について生徒同士で確認したり、作品にはない部分を想像して盛り上がった場面が見られた。『盆土産』グループやグループ以外の人の意見を聞いたり相談したりしながら、指定された言動に関わる表現や描写・意味を本文から探すことができた。

<第3学年 分科会の様子>

【レポート交流から】

『俳句』想像が広がる作品が多かった。鑑賞を楽しむことができた。ICT活用に挑戦しているが、他の人の実践例を知りたい。好きな季語を使って俳句を創作。スプレッドシート活用。光村の情報誌を参考に授業。ICT活用。実際に歳時記を手にとって季語を調べさせる。生徒にとって新鮮。『論語』表現力をつける授業。論語の意味を説明させるときに、説明の対象を限定(自分より年下の子)し、伝わりやすい表現を考えさせる。Google Forms やスプレッドシートなど、日ごろからICTを活用するようにしている。

▼俳句の実践が多かった。授業者の北條先生も俳句の授業を公開してくださったので、色々な視点から俳句の授業について考えを深めることができた。ICTを使った実践が多く発表され、こちらも様々なアイディアを得ることができた。ICTを活用すると、国語が苦手な子も抵抗なく自分の考えを打ち込むことができる。しかし、書籍の歳時記や図書室の本など、アナログな手段も生徒にとっては新鮮である。バランスを見ながら使い分けることが大切。



Ⅲ. 教育課程の研究

続くコロナ禍の中、十分とはいえない状況ではあったが、研究主題の解明に努められるよう、教育課程委員を中心に新学習指導要領に応じた編成を協議検討した。特に若い年代の教員への周知を徹底した。石狩管内の生徒の実態に応じた編成や修正を進めていくため、部会員から幅広い意見・情報を収集して、教育課程編成の参考にしていきたいと考える。第二次研究協議会でも多く触れられていたが、GIGAスクール構想に伴うデジタル端末を活用しての実践が、学習形態も含めて基本的なものから、先進的な取り組みまで蓄積されてきた。今後も管内各校における実践を蓄積し、現場の実践を踏まえた編成作業を進めていく。そのためにGoogle Workspaceも効果的に活用し、情報共有に鮮度の良さという利点を加えて進めていく。

Ⅳ. 理論研修会

1. 理論研修会

- (1) 日時 9月12日(月) 午後開催
- (2) 場所 石狩教育研修センター
- (3) 講師 江刺家 真氏(恵庭市立柏陽中学校 教諭)
- (4) 演題 主体的な探求へ導く「質問づくり」
内容 ①部長挨拶 ②講師紹介 ③講演 ④質疑応答

2. 理論研修会の成果

質問づくりをきっかけに、主体的・対話的で深い学びについて考える…というゴールを設定し、中1「大人になれなかった弟たちに……(米倉斉加年)」を題材に使用し、参加者が生徒役として質問づくりを体験し、学んだ。

4つのルール(できるだけたくさんの質問を出す。話し合ったり、評価したり、答えを言ったりしない。発言のとおりに質問を書き出す。肯定文として出されたものは疑問形に転換する。)をもとに、閉じた質問(「はい・いいえ」など簡単な言葉で答えられるもの。)と開いた質問(説明が必要なもの。)をつくって生徒同士で分類する、といった具合。もちろん研修会に集まったのは国語科の教諭だったので、質問は両方とも多岐にわたった。

取り組む中で気付かされたのは、漫然と読むだけでは単純な「閉じた質問」ならまだしも、「開いた質問」のように5W1Hが含まれ、「～だろうか。」のように、仮説の含まれた質問はつくり難いということ。情報を整理しながら、考えながら読んで質問をつくる活動を通じ、生徒は3つの思考力(発散思考・収束思考・メタ認知思考)をトレーニングすることになる。

「なぜ母は、ヒロユキが幸せだと言えたのか。」のような、思考力を発揮して質問をつくることは、題材の深部に迫る有効な手立てのひとつだといえる。生徒と授業をつくりたいという講師の思いに触発され、今後の授業づくりに大いにいかしたくなる、そんな示唆を与えられた研修会であった。

Ⅴ. 部会研究の成果と課題

〈成果〉

創意工夫という言葉は、我々教師にこそ必要な言葉だと今年度も感じた。録画の授業を予め見ることで、気になるところは何度も見返しておき、限られた協議を濃密なものにする工夫。端末を使わせる側である教師の、得手不得手問わぬ実践に多く触れることで、己が知識・技能のブラッシュアップとする工夫。多忙な我々にとっても授業改善は必須であり、そのうえで管内全体において研修を行うことの意義、特に成果は大きいといえる。

〈課題〉

今後もコロナの状況を見極めた運営や開催となるであろう。ただ実際に授業を参観するというライブ感や、録画では得難いものである。端末の活用や新しい評価についても、継続した討議や交流が必要な内容であると考えている。

(文責 田口 健太郎)